

# くにたち しらべ



NO. 3

発行日 2008 年 2 月 21 日

編集＝くにたち地域資料ボランティア

発行＝くにたち中央図書館

テーマ

## 『史跡建造物・南養寺』

### 南養寺（谷保6218）

南養寺は、谷保山と号し、立川普濟寺<sup>#1</sup>の末寺で近在きっての古い由緒ある寺です。開基は武蔵七党<sup>#2</sup>の一人、地元有力武士、立川入道宗成<sup>むねしげ</sup>で、立川に館を築いたのがはじまりです。宗成はここを「野堡」（やほ）と呼び、これが谷保という地名のおこりだという説もあります。貞和8（1347）年の村上天皇の時代に、立川宗成は、城郭の西側にある一院を修築して鎌倉から物外可什<sup>もつがい かじゅう</sup>和尚を迎え入れ、初代開山としたと伝えられています。開山当時は「嶺梅山南陽安国禅院」と称しました。本尊は釈迦如来です。

二世謙叟宗礼<sup>けんそうそうらい</sup>は物外の法嗣で鎌倉寿福寺<sup>じゅふくじ</sup>にいた人です。10世天叟宗祐<sup>てんそうそうゆう</sup>は建長寺177世、立川普濟寺6世で、永福寺の開山、元和7（1621）年に死去したと伝えられています。

開創以来、立川氏の保護を受けて、布教の上では、普濟寺とともに、武蔵国<sup>#5</sup>における禅宗、臨濟宗<sup>#6</sup>建長寺派に属し、教線拡大の重要な拠点でした。戦国時代には後北条氏から寺領の寄進を受けて保護され、大きな勢力をもっていました。北条氏からの前例によって、引き続き豊臣氏の黒印<sup>こくいん</sup><sup>#7</sup>あり、更に徳川幕府時代には、御朱印地<sup>ごしゅいんち</sup><sup>#8</sup>として寺領10石を賜り、寺としての格式は高いものでした。

天正18（1590）年小田原合戦<sup>#9</sup>のさい戦火にあい、諸堂ことごとく灰燼に帰してしまいましたが、文化元（1804）年に本堂が再建されました。中



南養寺位置:多摩らび\*13より



南養寺絵図（南養寺蔵）\*1

興開山は12世機雲祖<sup>きうんそおう</sup>応です。

本堂間口10間半(約19m)、奥行き7間半(約13.5m)、境内は約1万坪(約3.3万㎡)。池あり、小川あり、竹林あり、森あり、更に武蔵野の面影をとどめる雑木林あり。南面段丘上には、旧甲州街道がわずかに残って、段丘を下れば、そこはひろびろとした谷保<sup>でんぼ</sup>田圃が開けています。

御朱印寺<sup>おやま</sup>は、輪番7ヶ寺といい、立川の普濟寺、町田鶴川小野路の萬松寺、町田小山の宝泉寺、箱根ヶ崎の円福寺、村山の福生寺などと谷保の南養寺の七寺があり徳川将軍江戸登城独礼地として処遇されたものです。

- 1) 本堂 現在の本堂は、文化元(1804)年に大工佐伯右衛門、北島右衛門等によって建築されています。昭和56(1981)年の修理時、茅葺から銅葺に変えられました。本尊は釈迦如来坐像です。



- 2) 大悲殿 享保9(1724)年に新田<sup>しんた</sup>#10開発で上谷保



にあった藤井山円成院<sup>ふじやま えんじょう</sup>#11通野中(現小平市)へ移され、その後寛政5(1793)年に観音堂を移築したものです。観音堂は、矢澤大堅和尚<sup>やざわたいけん</sup>#14がその師実山道傳<sup>じつざんどうでん</sup>禅師により贈られた「十一面千手観音坐像」を安置するために享保3(1718)年に建立したと伝えられています。観音像は、立身長2尺(約60cm)の木像で、運慶の作になるといわれています。さらに大悲殿に描かれた天井画、壁面二十八部衆は絵画として優れたもので、大悲殿を一層貴重なものとしています。

- 3) 総門 安永9(1728)年大工佐伯源太によって建築され、形式は、



薬医門<sup>やくいもん</sup>#12で屋根は切妻造り<sup>きつまえぞうり</sup>#13の銅葺きです。これには前南禅僧録司大川崇達<sup>ぜんなんぜんそうろくじ</sup>の書による「谷保山」の扁額<sup>へんがく</sup>#14が懸かっています。当門の建立は、江戸期における南養寺伽藍整備の一端を示すものです。

- 4) 鐘楼 本堂に面して鐘楼があり、楼上是9尺(2.7m)四方、梵鐘は、



安永6(1725)年の鑄作と銘刻されています。梵鐘は、金、銀、銅、錫等の合金で、直径1m、高さ1.5m、谷保鑄物三家<sup>ぼんしょう</sup>#15の一つ下谷保の鑄物師関忠平衛により鑄造されました。鐘楼は天明8(1788)年に建立されました。四本柱形式で、屋根は入母屋造り<sup>いぼやぞうり</sup>#16で大正12(192

3) 年大震災による被害修復時に茅葺からトタン葺きに、さらに昭和56(1981)年の修理の際に銅葺に変えられました。

5) 庭園 本堂に北面した庭園(中庭)は、1,000㎡余りの庭園で、生垣



をもって背景を区切り、西側に築山を築き、植栽を主とした庭園です。使われている石はすべて小ぶりです。遠州流の禅宗の自然観の所産といわれる枯山水<sup>かれさんすい</sup>#17 様式の見事なもので、国立の庭園中随一の名に恥じぬものです。作庭年代は天保7(1836)年から天保10(1839)年と推

測されています。

6) 庫裏内の南養寺遺跡敷石住居跡 昭和57(1982)年に庫裏改修工事



南養寺遺跡(17号住居跡)\*1

の際に縄文時代中期末(約4千年前頃)の住居跡が発見され、発掘調査されました。この住居は、竪穴の平面形が柄鏡形をしており、床に石が敷かれている(柄鏡形敷石住居跡<sup>えかがみがたしきいし</sup>)。本体部は径3mの円形となり、中央に炉が作られ、入口部と推定される張出部は2.5m。非公開です。南養寺遺跡集落復元模型はくにたち郷土文化館に展示され

ています。

7) 諏訪ヶ池 南養寺鐘樓の南林にある放生池<sup>ほうじょう</sup>#18で、古くから諏訪池と呼ばれています。現在は、水は枯れていますが、古くは、矢川の流れによる侵食谷であったのが、流路が変わって出来た池と考えられています。かつては、矢川に添った小川の水をここに取り入れ、池から流れ出る水は、南方岨下の方へ注いでいました。

#### 語句の説明・解説 (\*数字は、引用文献を示す)

#1 立川普濟寺【たちかわふさいじ】立川市柴崎町にある。玄武山と号し、臨濟宗建長寺派。文和4(1355)年立川宗恒が、物外可什を開山として創建。その後立川氏の香華所として栄えた。江戸時代には幕府より20石の朱印状が付され、境内には緑泥片岩による国宝の六面石幢(せきとう)(延文6(康安元1361)7月6日銘)があり、開山像は応安3(1370)年の銘をもち重要文化財である。参考新編武蔵風土記119(\*15,\*16)

#2 武蔵七党【むさしちとう】中世,特に源平争乱期に武蔵国で活躍した党的武士団の総称。七党の呼称は吾妻鏡など鎌倉時代までの史料には見えず,中世後期に定着したものらしい。節用集は横山・猪俣・児玉・丹・西・私市きさい・村山党をもって七党とするが,野与党や綴つづき党を入れる説もある。党名は丹党が丹治氏に由来するのを除いて,本拠とする地名によっている。桓武平氏流の河越氏などが〈高家〉とよばれたのに対して〈党の者〉とされ,国内では高家である河越・畠山氏の軍事統率下に置かれていた。(\*12)

#3 物外可什【ぶつがいかにゅう】(1281~1363)鎌倉南北朝時代の臨濟宗大応派の僧。久し

## I-1 南養寺

く南浦紹明に参じた後、元応2（1320）年に入元し、在元10年後、元徳元（1329）年博多に着岸した。後に建長寺の首座となる。武蔵国の普濟寺（立川市柴崎）、南養寺（国立市谷保）、宝泉寺（町田市小山）、濟徳寺（品川区北品川）も開創した。（\*15,\*16）

#4 南浦紹明【なんぼじょうみん】1235～1308（嘉禎1～延慶1.12.29）鎌倉時代の禅僧。駿河に生れ、建長寺の蘭溪道隆に参じ、正元元（1259）年入宋して虚堂智愚の法を嗣いだ。1267年帰国し、筑前早良の興徳寺、横嶽の崇福寺等に住し、絶崖宗卓・通翁鏡円・宗峰妙超らの大応派と称される弟子を育てた。後宇多法皇から円通大応国師の勅諡号を与えられた（国師号の濫觴）。（\*12）

#5 武蔵国【むさしのくに】埼玉県、東京都および神奈川県東部の旧国名。はじめ東山道、771（宝亀2）東海道に転属。国府は多摩郡、現東京都府中市に置かれた。多くの渡来人が配され、積極的な開発が展開された。平安後期、牧を背景に武蔵七党、板東平氏の中小武士団が輩出。鎌倉時代は頼朝の知行国（関東分国）となり、北条氏嫡流が国司と守護を兼ねる。室町・戦国時代は変動が激しく、鎌倉公方上杉氏、そして後北条氏の傘下となったが、徳川家康の江戸開幕により大部分は天領、旗本・譜代大名領となる。明治初期に1府2県に分かれ、現在にいたる。（\*12）

#6 臨濟宗【りんざいしゅう】禅宗の一派。中国の臨濟義玄に由来し、宋代には黄竜派と楊岐派に分れて禅宗最大の勢力となった。日本へは1171（承安1）入宋した叡山の覚阿が楊岐派を伝えたのが最初であるが、その系統は定着せず、本格的には栄西を待たなければならなかった。その後、入宋僧や来日僧によって多くの流派が伝えられ、室町期になると五山制度の確立と相まって中央に勢力を築いた。しかし、その系統は応仁の乱以後衰え、替って南浦紹明（なんぼじょうみん）の大応派が厳しい禅風によって進出した。江戸時代にこの系統から白隠慧鶴（えかく）が出て、今日の臨濟宗の基礎を築いた。（\*12）

#7 黒印【くろいん】朱印は黒印よりも優位に、そして黒印は、略式のもととして使用された。黒印は古代から文書には全く使われず、写経、典籍の類に押した。（\*8）

#8 朱印地・黒印地【しゅいんち・こくいんち】江戸時代寺社が將軍の朱印状の発給を受けて、領主として執行する地域および地主として所持する土地を朱印地といい、それが大名の黒印発給による地域・土地である場合黒印地という。（\*8）

#9 小田原合戦 天正18（1590）年豊臣秀吉が小田原北条氏を滅ぼし、関東地方を政権下に組み入れた戦い。一般に小田原征伐・小田原の役ともいう。西日本の平定を終えた秀吉は北条氏討伐を決意し、3万の軍勢を率いて京を発った。北条氏は小田原城に籠城した。北条氏照も八王子城を出て、小田原に籠城した。八王子城は北条氏照の重臣が立てこもったが、6月23日上杉景勝、前田利家の連合軍の猛攻を受けて落城した。（\*12,\*1）

#10 新田【しんでん】江戸時代にあらたに開墾された田畑のこと。（\*11）

#11 円成院【えんじょういん】（跡地 谷保1622 現存せず）と大拳

矢沢大拳（大賢）和尚は延宝4（1767）年谷保村で生まれた。10歳で出家、臨濟宗分派である黄檗宗の実山和尚の弟子となり、28歳の春に藤井山円成寺の住職に命じられる。宝永2（1705）年に、相模国の石蔵山浄業寺の末寺であった円成寺を廃して、当地武蔵の黄檗宗海福寺を本寺とする藤井山円成院を開いた。その後、大拳は、幕府の新田開発令を受け、享保7（1722）年矢澤籾ら11名と百姓寄合を作り、新田開発にあたり、小平市野中新田500ヘクタールの基礎を築いた。新田開発の際、享保9（1724）年 上谷保村から通野中（とおりのなか）（現小平市）へうつされ、翌日には毘沙門天堂の遷宮祭が行われた。さらに翌年毘沙門天堂が南野中に分祀された。大拳は南野中に末寺として鳳林院をもうけてその開祖となった。

#12 薬医門【やくいもん】本柱の後方に控柱2本を建て、切妻屋根をかけた門。大規模なものは正面を

3間（本柱4本）とし、控柱も4本とする。（\*11）

#13 切妻屋根【きりづまやね】棟を界として両方に流れを持つ、書物を半ば開いて伏せた形の屋根。  
（\*11）

#14 扁額【へんがく】門戸・室内などにかける細長い額。（\*11）

#15 鋳物師関氏と矢沢豊後守 江戸時代、谷保には三人の鋳物師がいた。その一人は、千丑<sup>ちうし</sup>矢沢家の祖、矢沢豊後守である。関東鋳物頭領として、奈良東大寺の大仏製作にも参加している。東京新宿天竜寺の大梵鐘も同人の手になるもので、現在文化財として指定されている。この矢沢豊後守と、坂下川原の森窪氏、下谷保の関氏が“谷保の鋳物三家”と云われた。下谷保の関氏は、江戸時代から明治時代の初めまで代々鋳物業を営み、仏像、梵鐘、擬宝珠（ぎぼし）などの作品が残されている。

この三家の邸内からは、いまでも鋳物の残滓<sup>ざんし</sup>が出る。関氏の邸あとからは、粘土をつき固めたブロックや、鋳型、鉄滓<sup>てつかす</sup>、キュボラの破片などが、数多く発見されている。

#16 入母屋造【いりもやづくり】上部は切妻<sup>きりづま</sup>のように2方へ勾配を有し、下部は寄棟造のように4方へ勾配を有する屋根形。（\*11）

寄棟造よせむね-づくり 屋根の形式の一。四つの流れを組み合わせた屋根。大棟の両端から四隅に降くだり棟の降りている屋根。なお、地域により、正方形平面で1点集中のものを指すことがある。（\*11）

#17 枯山水【かれさんすい】水を用いず、ただ地形によって山水を表す庭。石組を主とし、水を表すのに砂礫<sup>されき</sup>を用いることがある。室町時代に輸入した宋・明の山水画の影響による。大徳寺塔頭<sup>たつちゆう</sup>大仙院や竜安寺の庭の類。（\*11）

#18 放生【ほうじょう】捕えた生物をはなちがすこと。仏教で慈悲の行いとする。（\*11）

#### 出典・参考資料（〔 〕内の記号は 国立市中央図書館図書記号）

- 1) くにたちの歴史 編纂 国立市 平成7（1995）年 [10・B1]
- 2) 国立市史 上中下 編纂 国立市 昭和63（1988）年 [10・B1]
- 3) 国立歳時記 原田重久 昭和44（1969）年 [10・B1]
- 4) くにたち歴史探訪ガイドブック 改訂版 平成16（2004）年 [10・C6]
- 5) 国立風土記 原田重久 迷水亭書屋 昭和42（1967）年 [10・B1]
- 6) 日本の神仏の辞典 大島建彦他 大修館 2001年 [R162]
- 7) 日本歴史大系13（東京都の地名） 平凡社 2002年 [R291]
- 8) 国史大辞典13 吉川弘文館 1992年 [R291]
- 9) 日本人物文献目録 法政大学文学部史学研究室 1974年 [R281]
- 10) 日本人辞典 平凡社 1938年 [R281]
- 11) 広辞苑第5版 三省堂 1998年 [R813]
- 12) 岩波日本史辞典 岩波書店 1999年 [R210]
- 13) 多摩ら・び 2002No.20 スケッチで見る谷保風景 関敏 けやき出版 2002年 [02・A5]
- 14) 神社名鑑 神社本庁 1963年 [R175]
- 15) 総合佛教大辞典 法蔵館 2005年 [R180]
- 16) 日本仏教史辞典 今泉淑夫他 吉川弘文館 1999年 [R182]